慢性副鼻腔炎と咽喉頭異常感

— ロキシスロマイシン療法による検討 —

石田 達也¹⁾・小池 靖夫²⁾・石谷 保夫²⁾・幸田 純治²⁾
武田 直也²⁾・嶋田 高明²⁾・堀 洋二²⁾・岡田 修治³⁾
馬淵 厚至³⁾・日根 其二⁴⁾・山口 幹夫⁴⁾・大津 信也⁵⁾
川田 育二⁶⁾・平本 博之⁶⁾・阿部 律子⁷⁾・阿河 邦治⁸⁾
酒巻孝一郎⁸⁾・小佐井 真⁹⁾・近藤 昭男⁹⁾

Foreign-body Sensation in the Throat in Patients with Chronic Sinusitis

Tatsuya Ishida (Takamatsu Red Cross Hospital), Yasuo Koike, Yasuo Ishitani, Junji Koda, Naoya Takeda, Takaaki Shimada and Yohji Hori (University of Tokushima School of Medicine), Shuji Okada and Atsushi Mabuchi (Tokushima Prefectural Central Hospital), Mikio Yamaguchi (Tokushima Prefectural Miyoshi Hospital), Shin-ya Ohtsu (Tokushima Prefectural Kaifu Hospital), Ikuji Kawata and Hiroyuki Hiramoto (Anan Kyoei Hospital), Ritsuko Abe (Oe Kyodo Hospital), Kuniharu Agawa and Koichiro Sakamaki (Yashima General Hospital), Makoto Kosai and Akio Kondo (Kochi Red Cross Hospital)

In a series of 191 patients with chronic paranasal sinusitis 54.4% had foreign-body sensation in the throat (FBST). Roxithromycin (RXM) was administered for about 2 months. The post-arytenoid area was examined for pus and the patients were divided into the following three groups: 1) pus present but disappeared with treatment (35 patients); 2) pus present both before and after treatment (9 patients); 3) no pus either before or after treatment (60 patients). Group 1 had much higher rates of recovery from nasal symptoms and efficacy rates than did group 2. The FBST scores of group 1 patients improved with treatment (4.02→3.04), but there was virtually no change in group 2 (3.53→3.64).

These results indicate that FBST can be induced by postnasal discharge in patients with chronic paranasal sinusitis and can usually be reduced by treatment with appropriate antibiotics.

Key words: chronic paranasal sinusitis, foreign-body sensation in the throat, post-arytenoid area, postnasal discharge

1) 高松赤十字病院耳鼻咽喉科
3) 徳島県立中央病院耳鼻咽喉科
5) 徳島県立海部病院耳鼻咽喉科
7) 麻植協同病院耳鼻咽喉科
9) 高知赤十字病院耳鼻咽喉科

2) 徳島大学医学部耳鼻咽喉科学教室
4) 徳島県立三好病院耳鼻咽喉科
6) 阿南共栄病院耳鼻咽喉科
8) 屋島総合病院耳鼻咽喉科

はじめに

日常の耳鼻咽喉科診療において咽喉頭異常感の訴えにはよく遭遇するものである。しかし、原因検索の方法が基準化されておらず、また検索によって発見された疾患が咽喉頭異常感の真の原因であるかについての検討も未だ十分ではないため、混乱をきたしているのが現状である。

今回我々は、慢性副鼻腔炎を取り上げ、治療状況と咽喉頭異常感の推移につき調査を行い、因果関係につき検討を行ったので報告する。

調査方法

調査は徳島大学医学部耳鼻咽喉科学教室を中心とする関連8施設(表1)において行った。調査期間は平成4年4月から平成5年3月までとした。

対象は外来受診時に慢性副鼻腔炎と診断した症例とし、まず咽喉頭異常感の有無を問診した。そして異常感を有する症例については、ロキシスロマイシン(以下、RXM と略す)療法(1日

量 300 mg 分 2)を原則として2カ月間施行し、投与前後の鼻に関する自覚症状・他覚所見、喉頭の他覚所見および咽喉頭異常感の変化を観察(表2)した。なお、RXM 療法による慢性副鼻腔炎の改善率に関する検討結果は同一症例を用い既に発表済み¹⁾である。

症状および所見の記載については、原則として“高度”を3, “中等度”を2, “軽度”を1, “無し”を0と表記することとした。そして馬場ら²⁾の方法にのっとり、自覚症状・他覚所見を著明改善・改善・軽度改善・不変の4段階に判定し、さらに統一臨床効果判定により著効・有効・やや有効・無効の4段階で評価した。な

表 1 共同研究実施施設

徳島大学医学部耳鼻咽喉科学教室
徳島県立中央病院耳鼻咽喉科
徳島県立三好病院耳鼻咽喉科
徳島県立海部病院耳鼻咽喉科
阿南共栄病院耳鼻咽喉科
麻植協同病院耳鼻咽喉科
屋島総合病院耳鼻咽喉科
高知赤十字病院耳鼻咽喉科

表 2 観察項目

① 鼻の自覚症状
鼻漏
鼻のかみややすさ
後鼻漏
後鼻漏の出しやすさ
鼻閉
頭重
嗅覚障害
② 鼻の他覚所見
鼻粘膜発赤および浮腫
鼻汁の量
鼻汁の性状
③ 喉頭所見
喉頭粘膜の発赤
喉頭粘膜の浮腫
喉頭膿汁貯留
④ 咽喉頭異常感(表3)

表 3 咽喉頭異常感スコア

1. ごくたまに、ノドの奥にからんだ感じがする。	2.0
2. ときどき、ノドの奥がムズムズする。	2.9
3. 朝起きたとき、ノドがイガイガする感じがある。	3.2
4. のんだ薬が、ひっかかったときのような感じがする。	3.8
5. いつもノドの奥がかゆい。	4.1
6. ツバをのみ込むときに、ひっかかる感じがする。	4.6
7. ノドのどこかに、何かが貼りついている気がする。	5.1
8. ノドにアメ玉がひっかかっているような気がする。	5.5
9. ノドに骨がささって、その周りが腫れているような気がする。	6.3
10. ノドの奥に大きな塊があるようだ。	6.8
11. ノドを手でしめつけられているような感じがする。	7.1
12. ノドがつまって、食物も水も全く通らないような感じがする。	8.2

お喉頭膿汁貯留の項目に関しては“有り”“無し”で記載し、前後で比較した。

咽喉頭異常感の評定については小池ら³⁾の作成した咽喉頭異常感スコア(表3)による評価法を採用した。

結 果

集積症例は慢性副鼻腔炎患者191例となり、問診の結果、うち104例(54.5%)に咽喉頭異常感の訴えが認められた。この104例のうち喉頭粘膜の発赤、浮腫所見が認められた症例はそれぞれ100例、97例あり、喉頭膿汁貯留が認められた症例は43例あった。そして RXM 投与により、喉頭粘膜の発赤および浮腫所見における消失または改善の率(以下、改善率とよぶ)は、それぞれ60.0%(60例/100例)、55.7%(54例/97例)となり、膿汁貯留例も9例に減少した。また咽喉頭異常感スコアは、RXM 投与によって

3.93から2.73に有意($p<0.001$)に減少した。

喉頭膿汁貯留に関して詳細に検討すると、投与後に喉頭膿汁貯留が認められた9例(以下、膿汁残存群とよぶ)のうち、8例は投与前から膿汁貯留が認められていた症例で、残る1例は投与前には膿汁貯留が認められなかった症例であった。従って投与前に喉頭膿汁貯留が認められた43例のうち RXM 投与後に膿汁貯留が消失した症例は35例(以下、膿汁消失群とよぶ)となり、投与前後を通じて膿汁が認められなかった症例は60例(以下、膿汁無し群とよぶ)となった(表4)。

喉頭膿汁貯留消失群、残存群および無し群における副鼻腔炎の効果判定結果および喉頭所見や咽喉頭異常感スコアの変化を比較したところ、自覚症状改善率は順に80.0%、44.4%、58.3%、他覚所見改善率は80.0%、33.3%、46.7%、統一臨床効果判定有効率は77.1%、33.3%、45.0%となった。喉頭発赤所見の改善率は順に69.7%、37.5%、60.0%、喉頭浮腫所見の改善率は65.6%、12.5%、51.9%、咽喉頭異常感スコアの変化は4.02から3.04、3.53から3.64、3.79から2.66となった(表5)。

考 案

今回の共同臨床研究で、副鼻腔炎患者においては咽喉頭異常感を有する症例が約半数あること、またそのほぼ全例において喉頭の発赤や浮

表4 喉頭膿汁貯留の推移

調査時期	喉頭膿汁貯留の有無			
投 与 前	(+) 43例		(-) 61例	
投 与 後	(-) 35例	(+) 8例	(+) 1例	(-) 60例
	消 失 群	残 存 群	無 し 群	

投与前に膿汁貯留を認めた症例のうち、投与後に膿汁が消失した例を消失群、投与後に膿汁貯留を認めた症例を残存群、そして投与前後を通じて膿汁貯留が認められなかった例を無し群と呼ぶこととした。

表5 喉頭膿汁貯留消失群、残存群、無し群における比較

		喉 頭 膿 汁 貯 留		
		消 失 群	残 存 群	無 し 群
自覚症状改善率*		80.0 %	44.4 %	58.3 %
他覚所見改善率*		80.0 %	33.3 %	46.7 %
統一臨床効果判定有効率**		77.1 %	33.3 %	45.0 %
喉頭所見	発赤改善率***	69.7 %	37.5 %	60.0 %
	浮腫改善率***	65.6 %	12.5 %	51.9 %
(投与前)		4.02	3.53	3.79
咽喉頭異常感スコア		↓ $p<0.01$	↓ N.S.	↓ $p<0.001$
(投与後)		3.04	3.64	2.66

*: 著明改善および改善の率、**: 著効および有効の率
***: 消失または改善の率(検定はt-testによる)

腫所見が認められることが判明した。この喉頭における所見は、喉頭自体の変化によるものと続発性に喉頭に生じた変化によるものとに大別されると考えられる。

ここで喉頭膿汁貯留の消失群と残存群の比較を行ったところ、消失群の方が鼻の自覚症状・他覚所見の改善率ならびに統一臨床効果判定有効率は高かった。よって、喉頭膿汁貯留の改善は副鼻腔炎の改善に負うところが大きいと判断され、喉頭膿汁貯留が副鼻腔炎の後鼻漏によって生じた現象としてとらえることができると考えられる。

さらに膿汁消失群と残存群における咽喉頭異常感スコアの変化を比較すると、消失群ではスコアが有意に改善したのに対して、残存群ではスコアの改善は認められなかった。この明らかな差からみて、後鼻漏が咽喉頭異常感の成因に大いに関わっていると結論される。後鼻漏が明確な症例では、抗生剤療法によって後鼻漏の消失を目指すことにより後鼻漏由来の咽喉頭異常感の軽減を期待できると考えられる。

喉頭膿汁無し群は、喉頭への後鼻漏の影響が元来少ない症例群と考えられる。よって同群における抗生剤投与後の喉頭発赤、浮腫の改善および咽喉頭異常感スコアの軽減は、喉頭への薬剤の直接効果によるものと考えられる。ここで膿汁消失群の喉頭所見改善率をみると、膿汁無し群の同改善率よりやや優っていた。従って、膿汁消失群における咽喉頭異常感スコアの軽減は、喉頭への薬剤の直接効果に加え、薬剤の後鼻漏軽減効果によって生じたものと考えられる。また膿汁残存群の喉頭所見改善率が低かったことからみても、喉頭に膿汁が貯留している症例では、膿汁が無い症例に比して、後鼻漏の影響によって喉頭所見がより悪化している可能性があるものと考えられる。副鼻腔気管支症候群という概念があるのと同様に、後鼻漏による喉頭粘膜障害も臨床的には十分考慮にいれておく必要があるものと考えられる。

以上より、副鼻腔炎による後鼻漏が咽喉頭異

常感の原因の1つになり得ること、および副鼻腔炎患者における咽喉頭異常感例が多く存在し、適切な抗生剤療法にて軽快感が得られる場合が多いことが判明した。

今後逆に咽喉頭異常感を訴える患者においては、喉頭膿汁貯留所見はもとより喉頭の発赤、浮腫にも注意を払い、副鼻腔炎由来の異常感を積極的に検索することが大切であると考えられる。副鼻腔炎が認められたときには異常感軽減に抗生剤療法が有効である場合が多いという事実が判明したため、抗生剤投与により経過観察を行うのも咽喉頭異常感症例におけるスクリーニング法の1つとなり得ると考えられる。

効果的なスクリーニング法の確立、基準化が望まれるなか、今回の共同臨床研究の成果は非常に有意義なものであったと考えられる。

ま と め

慢性副鼻腔炎患者191例を調査したところ104例(54.5%)に咽喉頭異常感の訴えが認められた。この104例に対してロキシスロマイシン療法を行ったところ、喉頭膿汁貯留所見の推移によって、膿汁消失群(35例)、膿汁残存群(9例)、膿汁無し群(60例)の3群に区分された。膿汁消失群では、膿汁残存群におけるよりも、鼻の自覚症状・他覚所見改善率および統一臨床効果判定有効率ははるかに高く、膿汁消失群では咽喉頭異常感スコアの軽減が得られた(4.02→3.04)のに対して、膿汁残存群ではスコアは不変(3.53→3.64)であった。

以上より、副鼻腔炎による後鼻漏が咽喉頭異常感の原因の1つになり得ること、および副鼻腔炎患者における咽喉頭異常感例が多く存在し、適切な抗生剤療法にて軽快感が得られる場合が多いことが判明した。

参考文献

- 1) 石田達也, 小池靖夫, 石谷保夫, 他: 慢性副鼻腔炎とロキシスロマイシン療法. 耳鼻臨床 87 : 569~578, 1994.
- 2) 馬場駿吉, 木下治二, 河村正三, 他: Norfloxacin の副鼻腔炎に対する臨床効果. 耳鼻 32 :

924~945, 1986.

- 3) 小池靖夫, 石谷保夫, 中村克彦, 他: 咽喉頭異常感の数量化について. 耳鼻臨床 補23: 46~50, 1988.

(原稿受付: 平成5年11月19日
原稿採択: 平成6年1月31日 急載
別刷請求先: 石田達也
〒770 高松市番町4-1-3
高松赤十字病院耳鼻咽喉科)